

Metz M. H, 2000, "Sociology and Qualitative Methodologies in Educational Research" *Harvard Educational Review*, vol.70(1),pp.60-74.

(メッツ、「イギリスにおける教育学的エスノグラフィー」)

はじめに (pp. 60-61)

- ・ 本論文では以下のことを行う
 - ①：教育研究で広く使われている方法論に対する質的社会学の貢献の整理
 - ②：教育における社会的プロセスの理解への質的社会学の実質的な貢献の確認
 - ③：質的社会学の方法論とその他の 2 種類の教育における質的研究との相違点を論じ方法論的な緊張緩和 (détente) のための提案
- ・ 質的研究を方法 (method)、つまりツールの集合としてではなく、その研究の基礎となる方法論 (methodology) の集合として理解する必要がある。
 - 方法論とは、研究をどのように進めるか、あるいは進めるべきかについての理論と分析を指す。教育における質的方法論には、知識、自己、社会的相互作用、文化、社会の性質に関する仮定や命題が含まれており、それらは複数ありうる。
 - 質的研究を、質的方法論の集合体として定義することで、方法論間の共通点や差異を整理することが可能になる。

質的社会学の研究方法 (pp. 61-65)

シカゴ学派 (pp.61-62)

- ・ 質的社会学のルーツはいくつかあるが、中でもシカゴ学派は 20 世紀初期から大きな影響力を持ってきた (G・H・Mead や Ellsworth など)。
 - 彼らは、人びとの事象の理解や解釈が社会的に構築されたものであると考え、社会と個人の結びつきにおける「意味」を重視している。
 - ロバート・パークやその後続の研究群は都市における多様な人びとの生の記述を蓄積してきた (例えば、トーマス&ズナニエツキ『生活史の社会学』や、アンダーソン『ホーボー』など)。そしてそれらの研究群はアメリカの社会学における基礎的な文献となっていた。
- ・ しかし、質的研究方法論が社会学の中で重要な位置を占めていた期間は短い。20 世紀の後半 3 分の 2 は、社会学一般、特に教育社会学は測定可能な「科学的」社会学の論理と実践に支配されていた。
 - そこでは局所的な相互行為ではなく、広範な社会構造と意識の関係が重視される。

研究方法論への質的社会学の貢献 (pp.62-64)

- ・ 上記のように社会学の中で疎外されているにもかかわらず、質的研究の伝統は存続している。質的研究の方法論における以下の4つの要素は創設期のシカゴ学派に由来する。
 - ①：ある集団を理解するために、その集団の世界観を集団自身の言葉で理解できるように努力している。
 - ②：長期間にわたる調査によって、分析や反省を繰り返したうえで集団内部のパーспекティブの発見を試みている。
 - ③：社会学者は自分の社会的レンズを分析に持ち込んでいる。単に自分が見たものの説明ではなく、特定の視点から行為や意識のパターンなどを分析している。
 - ④：多くの場合、シカゴ学派と同様に都市部の集団を研究対象としている。
- ・ 以上の要素は、教育研究においても重要である。なぜなら教育におけるグループ（例えば、教室、学校、ピアグループ、家族、隣人など）も、それ自身の意味体系をもつ集団として研究することが出来るからである。
- ・ 著者は、上記の①～③は「エスノグラフィー」の基本であると考える。

社会学と人類学 (pp.64-65)

- ・ 人類学者は「エスノグラフィー」という用語を作り出し、正統に用いている。
 - 「エスノグラフィー」という用語は、多義的であるが人類学者にとっては、先に述べた方法論に基づいて文化の全体的な研究を行うことを意味する。
 - それに対して社会学や教育分野においては、「エスノグラフィー」はより広義に用いられている。
- ・ 質的社会学と人類学には多くの共通点（先に挙げた①～③）があるが、次の点で差異があると考えられる。
 - 人類学者は、異文化間の接触を研究することもあるが、特定の社会全体の文化に重点を置く。対照的に社会学者は、研究対象となる事象が他のユニットの中でどのような入れ子構造になっているかを重視する傾向がある。
 - 人類学者は臨床医のように、一つの環境について可能な限りの説明と分析を求める傾向がある。社会学者は一般的に、自分が研究している設定から他の設定に一般化したいと考ええる。

教育の理解に対する質的社会学の実質的な貢献 (pp. 65-66)

- ・ アメリカの社会学における教育研究では、サーベイ研究が多くを占めてきた。生徒の社会的背景と学力到達度の相関を調査する研究に代表されるサーベイ研究には、学校内部

の相互行為を「ブラックボックス」にしているという批判がなされてきた。¹

- ・ 対照的に質的研究は学校内部の相互行為プロセスに焦点を当ててきた。それらの研究は教えること (teaching) の研究にも重要な影響を与えたが、最も直接的に貢献したのは学校組織の研究である。
 - 学校という組織は、原材料や製品が物ではなく子どもであり、高度な教育を受けた職員が曖昧な状況の中で都度の判断をくさなければならぬといった特徴を持つ。
 - 他にも Waller (1932) は *The Sociology of Teaching* (邦題:『学校集団』) の中で、学校は公的な組織であり、教師と生徒らによって構成される小さなコミュニティであることを指摘している。
 - その後は、社会学でも教育分野でも、インフォーマルなシステムや組織文化の重要性は、発見されたり、失われたり、再発見されたりを繰り返している。

教育における質的研究の将来 (pp. 66-68)

- ・ 現在、さまざまな学問的背景、方法論、実質的な関心を持つ研究者が、多様な形で教育における質的研究に取り組んでいる。以下では 2 種類の質的研究を取り上げる。そのどちらも質的社会学に関連した方法論を持っているが、互いに相反するものである。
 - ①質的手法に基づいた大規模な事例研究 (質的なアンケート調査など)
 - ・ 質的要素に基づいた大規模な混合研究プロジェクトの一部として行われており、政策研究者、量的社会学者も魅力を感じている。
 - ・ この研究の多くは量的研究に適した演繹的な論理で研究を進めており、量的データの分析を豊かにするという点でメリットがある。一方で、調査の中で用いられる質問に対する調査対象者の直接的な回答以上に、対象者の視点を分析しない傾向にある。
 - ・ エスノグラフィーよりも簡易で安価に行うことができるため、この種の調査が「質的調査」というラベルを使用することでエスノグラフィーに取って代わってしまう危険性がある。しかし、そこではこの種の調査とエスノグラフィーには上記のように方法論的な大きな隔りがあることが認識されないままになってしまう。
 - ②「批判的」研究 (ポストモダニズム、フェミニズム、アクション・リサーチなど)
 - ・ 研究対象となる集団の内部者の視点を重視。
 - ・ 研究者による外部からの枠組みから研究対象者の世界を理解することへの批判がなされている。(例えば、西洋的、白人的、中流階級的な枠組みで理解されることへの

¹ ただし近年では、統計的手法を用いて多くの学校に共通する学校内部のプロセスを大まかに測定することができるようになってきていることも指摘されている。

批判)

- ・ 特に教育社会学における質的研究の将来は、誰が「社会学者」としてカウントされるかという曖昧さによって複雑になっている。現在、社会学的な傾向をもつ質的研究は、多様な人びとによってなされる傾向にある。

- ・ しかし、エスノグラフィーも他の質的方法論も、すべての問題に対して最も有効な方法論というわけではない。教育という営みは、単一の方法論で捉えるにはあまりにも複雑である。
 - 我々に出来ることは、単一の方法論の前提や手順を明確にすることで方法論間の無用な争いを避けることである。

- ・ どの研究ジャンルにも良い研究と悪い研究がある。
 - その判断を方法論の差異から切り離して議論するためには、新しいジャンルでは、そのジャンル内での価値を実践者と外部の読者の両方が判断できるような基準を作る必要がある。
 - また、多様な研究ジャンルが栄えるためには、研究アプローチ間の橋渡しをしたり、異なる研究結果の累積的な意義を明確にしたりすることに特化した人材が必要になる。
 - 研究者は多様な研究アプローチを正当化するための言語や社会的に共有される理解を見つける必要があるだろう。